

カナダの大学教育

筑波大学客員教授
ジョン・セイウエル



(1)

教育はカナダ最大の産業の一つである。カナダ国民の三人に一人は学生か教師か、あるいは教育関係の官吏であり、教育関係費は年間二百億ドルにも達しつつある。その総額は政府支出の一七パーセントを占めている。

なんとといっても初等・中等（日本の高校を含む）教育に大部分の費用がかけられてはいるが、それ以後の教育課程にも三分の一が支出されている。カナダには高校以後の高等教育を授ける教育機関が数多く存在する。特殊な職業訓練学校から多くの学部をかかえた巨大な総合大学まで、その種類も多い。今日では高校卒業生の四〇パーセントがさらに上級学校へ進学するが、これは一九六六年に一八パーセントの進学率だったのに較べると急激な増加である。最も一般的な進学先は大学およびコミュニティ・カレッジとよばれる学校である。コミュニティ・カレッジは州ごとにその性格を異にする。一般的には職業教育と半専門職課程および純学問的課目をミックスした教育が行なわれる。学位取得はできないが、いくつかの州では大学課程の第一ないし第二学年をそこで終えたり、コミュニティ・カレッジでとった単位の一部を大学に移したりできるようにしている。ケベックでは大学に行くすべての学生は二年間、カレッジに出席する義務がある。カナダ全土でいうと、現在百九十のコミュニティ・カレッジに二十五万人のフルタイムの学

生が在席している。

コミュニティ・カレッジは、実務分野を重視しているため、次第に人気が高まっているが、本格的な教育を望む学生たちにとって大学が大きな目標であることに変わりはない。十八才から二十四才までの人口の七分の一が大学に在学している。カナダの全大学にはフルタイムの学生だけで学部が三十五万人、大学院に四万人が在席する。だが、こうしたフルタイムの学生だけが学生なのではない。多くのカナダ人は仕事をしながら大学に通う。こうしたパート・タイムの学生のうち、多いのはフルタイムの職業を持つ社会人で、夜間や土曜日を利用して大学へ出席する。さらには子供が学校に行っている間だけ教室へ出てくる母親たちがいる。多くの大学がこうしたパート・タイムの学生のための特別な学部をもっている。合計するとパート・タイムの学部学生数は十六万五千名、大学院生は二万八千名に及んでいる。

(2)

カナダの大学の歴史はこの国の成立と時を同じくしており、いまだにフランス、イギリス、スコットランド起源の伝統を残す大学もある。（私が五〇年代中頃にトロント大学で教壇に立ちはじめた頃には、教室内で教授は古めかしいガウンを着用し、学寮に住む学生たちもガウンをまとってテイナリーの席についていたものである。）しかし今日の大学の組織は、第二次大戦中およびそれ以後にカナ

ダ教育界を席捲した革命的な転換によって、まったくちがった様相を示している。一九三九年まではカナダには二十八の大学しかなく、しかもそのほとんどがひどく小さくて活気のない存在であった。最大のもので学生数七千名に過ぎなかったのである。そこへ兵役を終えた若者がドツと帰ってきた。彼らが卒業した後には戦後のベビー・ブーム。これと期を同じくして、生活程度の向上と、教育こそが物質的な報酬と豊かな暮らしを約束する鍵であるという信仰があいまって、大学へ行く子女の数が一気に激増したのである。政府もこれに応えて高等教育に対する巨額の子算を計上し、十九の大学を新設し、既存のものについてはその規模を続々拡大せしめた。今日では六十六の学位取得可能な教育機関があり、そのうち四十七は通常の分類による大学にあたるものである。しかし、同じ大学といっても、その規模は学生数千人の小さなキャンパスから、学生数四万、多くの研究機関、巨大な図書館・試験所を有し、美術館、音楽堂などの完備したマンモス大学までいろいろである。

カナダの大きな大学は、米国の大きな大学と同様「マルチパーシテイ」（総合大学）とよばれることが多い。カナダには日本とちがって特殊な単科大学というものはない。大学にはふつう膨大な種類の講座が学部にも大学院にも設けられており、それらは芸術や自然科学、工学、応用科学、建築、法律、医学、環境、創作芸術、舞台芸術、経営管理および社会